Extra Daily-X'mas Lovers

斎藤一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｘｔｒａ　Ｄａｉｌｙ－Ｘ'ｍａｓ　Ｌｏｖｅｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ７６４６Ｗ

【作者名】
斎藤一樹

【あらすじ】
Ｄａｉｌｙ、クリスマス特別企画！
今回の主人公は、〈Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｄａｉｌｙ〉でもチラッと登場した神崎先輩です。

Extra Daily_X'mas Lovers 01（前書き）

粗筋でも述べたとおり、今回の主人公は〈Another Daily〉でもチラッと登場した神崎先輩です。

去年のクリスマス用に書き下ろしたもので、今年のクリスマス用の書き下ろしは明日にうpされる予定です。恐らくこちらはDailyとは無関係の話になる予定です。

Extra Daily_X'mas Lovers 01

電車を降り、俺は池袋駅に降り立った。構内を出ると、ヤマダ電機の正面に出た。
時刻は午後5時12分。周りを見渡せば、人、人、人。
スーツを着てトイザらスのビニール袋を下げて歩くお父さん、仲睦まじく手を繋ぎ歩く恋人たち……。
クリスマスイブの今日、街は人で賑わっていた。いつも人は多いのだが、今日はそれに輪をかけて混雑している。
そして、俺はというと。
「……よし、予定どおりだ」
サンシャイン60通りを少し脇道に行ったところにある、とある公園に入り、そこのベンチに腰掛けた。
俺はこの間、片思いの相手をデートに誘うことに成功した。そしてそのデートを行う日というのが、今日なのだ。
約束の時間まで、あと20分。

約束の時間から、10分が経過した。彼女は、まだ来ない。
それでも、何か事情があって遅れているのだろうと思い、膝に抱えたプレゼントをぎゅっと握り締めて待つ。

そして、約束の時間の30分後。ケータイにメールが来た。携帯を開き、内容を確認する。
「ごめん、私はやっぱり神崎とは付き合えません。今日のデートもキャンセルさせてもらいます」
……その時、俺の中の何かが音を立てて崩れた気がした。それは俺が彼女に対して抱いていた想いかも知れないし、もっと別の何かかも知れなかった。

取り敢えず公園から出て、サンシャイン６０通りを歩く。特に何処に行くといった目的も無いままに、ただ、人の波に流されるがままに歩く。
そうしていると、
「あら、大輝。こんなとこで何してんの？」
同じ部活の同級生であり、更にその部活の部長でもある竹崎綾菜がいた。
「…あ？……ああ、なんだ綾菜か」
まさかこんなところで出会うとは。
「なんだって何よ、なんだって。失礼ね、大輝の分際で」
「…お前の台詞よりはましだと思うが」
「まあいいわ、大輝、暇なの？」
「…まあな」
丁度予定が潰れちまったからな。
「じゃあ大輝、あたしにちょっと付き合いなさい」
「…何故そうなる」
「いいでしょ、別に。それとも…迷惑だった？」
そう言いつつ、上目遣いで俺のことを見る綾菜。…ダメだ、可愛すぎる。これじゃあ断れない。
「…わかったよ、一緒に行ってやる」
俺がそう言うと、綾菜は一転してうれしそうな顔になり、微笑んだ。その笑顔が少し眩しくて、俺は綾菜から目を逸らした。
「…で、どこ行くんだ？」
「んー。付いて来て！」
そう言いつつ、綾菜は俺を振り帰りもせずに歩き出した。
「…やれやれ」
溜め息を吐きつつ、俺は綾菜に付いて行った。

Extra Daily_X'mas Lovers 01（後書き）

去年、この話を投稿してから一週間ほど経ってから、〈竹達綾菜〉さんという声優さんの存在を知りました……。

メリークリスマス！斎藤一樹です。

まあ、これを書いているのは９／１６なのですが。一時的に雨が強く降ったり止んだり、不安定な天気です。あと蒸し暑い。

予約投稿システムは便利ですよね……。

しかし、相変わらず脈絡の無い後書きですね。それでは良い聖夜を。

Extra Daily_X'mas Lovers 02

最初に綾菜が行ったのは、サンシャインシティだった。
周りには、カップルばかりが目につく。自分が物凄く場違いな場所にいるような気がして仕方ない。
綾菜はその内のある洋服店に入り、品定めをしだした。手持ちぶさたになる俺。そして、ふと気が付いた。
俺たちは、傍から見てどう見えているのだろうか、と言うことを。
俺だったら、まず間違いなくカップルだと思うだろうな。
……落ち着かなくなって来た。
所在なくそわそわしていると、おもむろに綾菜が俺を振り返り言った。
「ねえ、大輝。どう、この服あたしに似合う？」
その手には、一着のワンピースが握られていた。
「…んー。まあ、いいんじゃないのか？」
ファッションに関して俺に聞くな。センスが無いのは自他共に認めるところだ。
しかし綾菜は、そんな俺の気の無い返事が不満だったらしく、
「何よ、何かもっと他に無いの？」
口を尖らせて、拗ねたように言った。そう言われても。
「…可愛いと思うが」
取り敢えずそう言ってやると、
「そ、そう？べ、別にそんな、か、可愛いだなんて大輝に言われたって、全然嬉しくなんか、な、無いんだからねっ！？」
綾菜は顔を赤くしつつ言った。どうやら少し照れているらしい。
「…はいはい、分かった分かった」
…畜生、そんな表情するんじゃねえよ。…好きになっちまいそうだから。

…どうして、こうなってしまったんだろう？俺は、何処で何を間違えてしまったんだろう…？

それから何軒か更に回り、俺と綾菜はサンシャイン６０通りに戻って来ていた。

「…結局何も買ってないけど、いいのか？」

「いいのよ、ああいうのは見るだけでも楽しいから」

「…そんなものか？」

「そんなものよ」

無言のまま、二人歩く。

「…なあ、次は何処に行くんだ？」

「そうね……。東武デパートに行きましょう。色々な店も入ってるし、暖かいし」

「…おう」

まだやるのか。そう思ったが、もちろん顔と口には出さない。

「……ほら、大輝」

声を掛けられたので綾菜の方を見ると、綾菜がそっぽを向きつつ左手を差し出していた。

「…何だ？」

「手！貸しなさい！」

は？

「…あ、ああ……？」

「べ、別に大輝となんか手を繋ぎたく無いけど、は、はぐれるといけないから、手を繋いであげるわ。か、感謝しなさい！」

「…へいへい」

互いに手を取り、手を繋いで東武デパートへ歩く。その途中で、

くうぅぅぅ～

可愛らしい音で、綾菜のお腹が鳴った。

「…その、まあなんだ、何か食ってからにするか？」

綾菜は顔を赤くしつつ頷いた。

と言う事で。俺たちはガストに来ていた。それぞれ注文を終え、互いに無言になる。
綾菜が、先に口を開いた。
「ねえ、大輝」
「…何だ？」
「あんた、何か悩んでない？」
「…当たらずと言えども遠からず、ってところかね……」
そこで、注文していたものが届いた。
俺はそれを口に運びつつ、ぽつり、ぽつりと話しはじめた。何となく綾菜になら、話してもいいような気がした。
好きな相手がいた事、その彼女を今日デートに誘った事、そして待ち合わせに来てもらえず、更に振られた事……。
話し終えると、大分すっきりした気持ちになった。結構色々あったと思っていたが、整理するとそれほどでもなくて、少し驚いた。
話を聴き終えると、綾菜は
「そうだったんだ……」
と、何処か寂しげに呟いた。
「……ねえ、大輝。今でも、その、そ、その娘の事、す、好きなの？」
「…どうなんだろうな……」
自分の手を見つめつつ、胸の内の想いを言葉に表そうと言葉を探す。
「…確かに、今でも俺は、彼女のことが好きなんだろうな」
「そ、そう…」
「…でも、さっきまでのような恋い焦がれるといった感じのモノでは無くなっている、気がする」

「へ、へえ……？」
「…振られた所為かな、それほど彼女が《特別な存在》じゃあなくなっている気がするんだ」
「そう……。だ、大輝。その、わ、私じゃあ、大輝の、と、特別な存在には、な、なれないかな……？」
「…そ、それって」
どういう意味だ、っていう台詞を途中で飲み込む。頭が一瞬、思考を放棄した。
綾菜は続けて言った。
「さ、最後まで言わせないでよ、恥ずかしいから……っ！」
例によって顔を赤くして、綾菜が言う。
その赤く染まった頬が、今の俺にはとても可愛く感じられた。
言葉を失った俺に、上目遣いで俺のことを見つつ綾菜は繰り返し問う。
「ど、どう……かな？」
覚悟を決めて、俺はしっかりと綾菜の目を見て答える。
「…綾菜がそれでいいのなら」
そう言うと、
「…ほ、本当にいいの！？」
綾菜はぱあっと顔を明るくして、にっこりと微笑んだ。その笑顔が見られただけでも、さっきのように答えた甲斐があった気がした。

ガストを出ると、外は更に寒くなっていた。どちらからともなく手を繋ぐ。綾菜の手は小さくて、そしてほんのりと暖かかった。
「……ねぇ、大輝？」
「…何だ？」
「……ううん、やっぱり何でもない」
「…そうか」
しかしまさか、こんな事になるとは。3時間前、俺は振られた事で呆然としていて、何も考えられなかった。でも、綾菜がそれを変

えてくれた。
ありがとうな、綾菜。口に出して言うのは少し気恥ずかしかったので、胸の奥でそう呟いた。

～Ｆｉｎ～

Extra Daily_X'mas Lovers 03（後書き）

去年、この話を投稿してから一週間ほど経ってから、〈竹達綾菜〉さんという声優さんの存在を知りました……。

メリークリスマス！斎藤一樹です。

まあ、これを書いているのは９／１６なのですが。一時的に雨が強く降ったり止んだり、不安定な天気です。あと蒸し暑い。

予約投稿システムは便利ですよね……。

しかし、相変わらず脈絡の無い後書きですね。それでは良い聖夜を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7646w/

Extra Daily-X'mas Lovers

2011年12月24日02時05分発行